

近世における江戸の球戯について

谷 釜 尋 徳¹⁾

Historical research on ball games in Edo during the early modern period

TANIGAMA Hironori

Summary

The purpose of this paper is to give an overview of the ball games that were played in Edo during the early modern period.

In this paper, ball games in Edo are classified into those involving use of the hands, those involving use of the feet, and those where the ball was struck with mallets or sticks.

The ball games handled in this paper are beanbags, traditional Japanese handball, kendama, ancient Japanese hacky sack with a ball, juggling balls, ancient Japanese hacky sack with a shuttlecock, ancient Japanese polo, and ancient Japanese field hockey.

Edo was a major city in early modern Japan. In Edo, a wide range of people that included samurai and ordinary men as well as women and children played various types of ball games.

From a different point of view, findings suggest that early modern Edo had a foundation that allowed the acceptance of Western ball games that arrived in Japan during the Meiji period.

1. はじめに

人類の歴史において世界中で多種多様な球戯が行われてきた。日本も例外ではなく、古来より社会の各階層で球戯を楽しむ人々がいたことがわかっている。

日本のスポーツ史上、人口の大半を占める庶民層が、武士や貴族を押しつけて身体運動を伴う遊戯（スポーツ）の中心的な担い手になったのが近世という時代である。特に近世後期になると、経済力を手にした都市の商工人が余暇の消費手段としてスポーツに身を投じるようになった。泰平の

世の実現により、殺法としての武術は精神修養を含んだ教養として生まれ変わり、庶民の身近な稽古事にもなる。こうして、スポーツで汗を流すこと自体を楽しむ時代が到来したといえよう。

この頃、100万の人口を抱える世界的な大都市だった江戸では、スポーツが日常化し、多様な球戯も存在した¹⁾。手足を巧みに使って技の出来栄を競うものから、ラケットスポーツ、チームスポーツに至るまで、老若男女の庶民や武士がボールの行方に一喜一憂した事実がある。

江戸の球戯は一定の競技性や技術性を内包しながらも、その運動自体を楽しもうとする遊戯性を

1) 東洋大学スポーツ健康科学（白山キャンパス）研究室 〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20

Sports and Health Science Laboratory, Toyo University, 5-28-20, Hakusan, Bunkyo-ku, Tokyo, 112-8606, JAPAN

色濃く表出していた。一方で、今日のボールゲームとは、Stiehlerらによれば「明確な達成目標をもち、途中経過がどうなるか定かでない競技形式によって行われる運動遊戯の一類型であり、国内あるいは国際的に遵守を義務づけられたルールにしたがい、個人対個人、もしくはチーム対チーム（相手との相互作用）により一定の時間内（ハーフタイム、セット、ゲーム、ラウンドなど）に勝敗が決せられる」²⁾ものだという。こうなると、江戸の人々によるボールを使った運動競技が、今日的な要件を漏れなく満たしているとは言い難い。そこで本稿では、近代スポーツとしての「ボールゲーム」や「球技」という名称とは区別し、球体ないし円形の物体を使って行う遊びとして「球戯」を採用することにした。

ところで、明治維新を迎え、極東に位置する日本も西洋と同じ時間を共有するようになると、数量的な合理主義によって編み上げられた近代スポーツの波が、日本にも本格的に到達する。その近代スポーツの受容と発展の歴史は、多くの日本の研究者を虜にしてきた。

一方、近代以前の日本のスポーツ史を解明しようとする試みは活発化していない現状にある。とくに、本稿で取り上げる江戸の球戯は、幅広い層の人々によって楽しまれていたものの、その実際は詳らかにされてこなかった。渡辺融の一連の蹴鞠史研究³⁾を除けば、近世の球戯へのアプローチは通史的な試み⁴⁾の中で紹介されてきたに過ぎない。それは、近代以前の日本の球戯に関して、日本人の手によって記された史料が不足していることも関係している。人々の日常のすぐ側にあった球戯について、当時の日本人が意識的に記録することは稀だったのであろうか。

しかし、日本人にとっては取るに足らないことでも、異文化の人々の眼には注目すべき事柄として映るケースもある。幕末～明治初期に來日した

西洋人の見聞録を紐解いてみると、彼らは西洋化以前の日本人の生活実態を自国文化と比べてつぶさに観察していた⁵⁾。その中には、球戯に関する観察記録もある。例えば、嘉永6（1853）～7（1854）年にかけて來日したHeineは、日本人の遊戯の特徴を、「球戯、風揚げ、的あての弓矢遊び、花札も好きである。」⁶⁾と記し、ボールを使った遊びの存在を指摘している。

こうして、訪日外国人の見聞録によって史料的な限界を補い、日本の史料と比較検討することで、より客観的な側面から江戸の球戯の実際に迫ることが可能になる。そこで本稿では、この時代に訪日した西洋人の見聞録も貴重な時代の証言として適宜引用しながら、江戸に広がっていた球戯の世界を探ってみたい。

ここで、本稿における球戯の分類に触れておく。今日、ボールゲームには多様な分類法があるが、内山は「戦術行為を基礎づける戦術上の種々の課題の違い」を基準に、「ゴール型」「ネット型」「ベースボール型」に分類している⁷⁾。また、Stiehlerらは「ゴール・ボール型」「打ち返し型」「投・打球型」「球送り・的当て型」という分類を行い⁸⁾、Griffinらは「侵入型」「ネット・壁型」「守備・走塁型」「ターゲット型」という分類システムを採用する⁹⁾。

しかし、統一ルールが整備され、高度に競技化が進んだ今のボールゲームの要件を江戸の球戯にも適用することは難しい。もっとも、上記のような分類に当てはまる球戯だけを取り上げるという恣意的な手法もあろうが、それは近世スポーツ史の視点を自ずから狭めることを意味する。

一方で、江戸の球戯においても、より高い成果を目指してボール操作の合理性や経済性が少なからず追求されていたことは想像に難くない。こうした技術史的な関心から、本稿では江戸の球戯を次のように分類した。すなわち、ボールの操作技



図① 石投子をする女兒たち（『江戸遊戯画帖』）

『江戸風俗絵巻—描かれたあそびとくらし—』横浜市歴史博物館，2004

法との関連から、「手を使う球戯」「足を使う球戯」「打具を使う球戯」の3つのタイプである。この区分けの下に個別の球戯を配していくことになるが、そこでは、ボールの形状や製法にも言及する。スポーツの「技術」と「用具」は、相互に補完し合って成立しているためである¹⁰⁾。

2. 手を使う球戯

ボールを手で扱う球戯として、お手玉、けん玉、手鞠をあげることができる。いずれも、近代スポーツと比べればルールの曖昧さは否めないものの、高難度の技術が要求される競技性のある球戯だった。

2-1 お手玉

今日のお手玉は、小豆や米などが入った小さな布袋を、手を巧みに使って一定のルールとタイミングで放り上げてはキャッチして遊ぶものが一般

的である。同時に複数の玉を使って難易度を上げることもある。ところが、近世のお手玉はその呼び名、プレイスタイルともに、今日とは少し様相が異なっていた。

近世には、「石投」「石子」「石投子」などという字を当てて「いしなご」と読ませる球戯が存在した。小石を地面にばら撒き、その1つを空中に投げ上げ、それが落ちてこない間に下の石をつかみ、これを繰り返して早く石を取り尽くすことを目指す。これが今日のお手玉の前身である。

近世後期の江戸で、石投子をする女兒たちの姿を描いた絵画が図①である。小石が用具として用いられている。右の女兒は小石を投げ上げ、左の女兒は手の甲で複数の小石を受けているようにも見える。

小石の代替物としてムクロジの木の実や貝を使うこともあったが、やがて江戸では、布製の袋の中に数粒の小石や小豆を入れて縫い合わせたポー



図② 女兒による手玉の様子（『風流おさな遊び』）
中城正堯『江戸時代 子ども遊び大辞典』東京堂出版、2014

ルが普及する。この「玉」を使って前述のルールで行う球戯を、江戸では「御手玉」「てだまとり」などと呼ぶようになった¹¹⁾。安永4（1775）年刊行の方言辞典『物類称呼』にも、「石投 江戸にて手玉といふ」¹²⁾と記されている。

図②は、女兒による「手玉」の様子である。女兒が1人で玉を投げ上げている。画中からは少々判別し難いが、使っているのは小石であろうか。

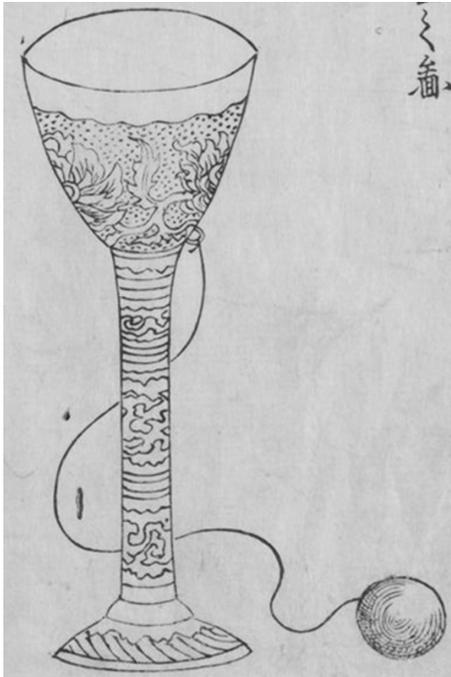
やがて、お手玉は、布袋をたくさん掌に握り、これを軽く上に放り投げ、手を返して甲で受け、再び投げて今後は掌に握り、フロアに落とさずいくつか残るかで勝敗を競うスタイルでも行われるようになった¹³⁾。こうなると、だいぶ今日のお手玉に近づいてくる。玉を投げ上げる高さや落とさ

ず上手に受けるテクニックが要求される球戯で、ジャグリングの要素も含まれている。

2-2 けん玉

今日のけん玉は、十字の剣と穴の開いた玉で出来た玩具で、紐で剣と結びつけられた玉を空中に放って剣に刺したり、横の十字部分や底部に設けられた皿にボールを乗せてプレーする。ところが、近世のけん玉は少しだけ様子が違っていた。

文化6（1809）年刊行の『拳会角力図会』には、「^{すくひ}玉拳」（すくい玉拳）という名称でけん玉に似た球戯が紹介されている。同書いわく、この球戯に使う用具は、唐桑、花梨、紫檀などの堅い木で製造したコップ（原文では「コツフ」）に



図③ 近世後期のけん玉
義浪『拳会角力図会 二巻』河内屋太助, 1809

長い紐を付けて、紐の先端に同じ木材から削り出したボールを結んだものである¹⁴⁾。

『拳会角力図会』で紹介されたけん玉のイラストが図③である。本体の先端に剣はなく、横に十字状に取り付けられた受皿もなかった。「コップ」に空中の玉を落とさず乗せるシンプルなゲームだったことになる。形状から見て、ひっくり返して底部の上に玉を乗せる芸当はあったかもしれない。「すくい玉」とは、このスポーツの形態を表現する絶妙なネーミングだったといえよう。

『拳会角力図会』はルールについても触れている。当事者間でコップに玉が乗るまでのチャレンジの回数を3回まで、5回までなどと事前に決めて勝ち負けを争うルールだった。酒宴の席で楽しまれることが多く、2人が交互にチャレンジして、失敗した方が酒を飲む慣わしだったという。また、玉をすくえるか否かで吉凶を占うケースもあったようである¹⁵⁾。

文政13 (1830) 年の『嬉遊笑覧』には「安永六、七年の頃、拳玉といふもの出来ぬ。猪口の形

して柄の(ママ)のあるもの也。それに糸を付けて玉を結たり。鹿角にて造る。その玉を投て猪口の如き物の内にうけ入る也。うけ得ざる者に酒を飲しむ。』¹⁶⁾という記述がある。

同書は「拳玉」という名でこの球戯を紹介し、登場の時期を安永6 (1777)～7 (1778) 年頃に見ている。用具は猪口の形で柄のついた本体に糸で玉を結んだもので、鹿の角で製造していたことがわかる。プレーの形態は『拳会角力図会』と同じ内容を示し、いかに受け皿に玉を乗せるか、その技を競うものだった。文中に「うけ得ざる者に酒を飲しむ」とあるので、やはり酒宴の際の催しとして流行したものと考えてよい。チャレンジに失敗するたびに酒を飲むので、場合によっては酩酊状態でけん玉をしていたことになる。

けん玉は、17世紀のヨーロッパで大人の遊びとして発明され、英語でカップ・アンド・ボール (cup and ball)、フランス語でビルボゲー (bribouquet) と呼ばれた遊びだという¹⁷⁾。日本への伝播経路は定かではないが、欧州発の遊戯文化が19世

紀初頭には日本に届いていた事実は興味深い。

2-3 手鞠

手鞠は、片手で手のひらサイズのボール（鞠）を巧みに操作して、地面に繰り返しバウンドさせる球戯である。その形態から「鞠つき」とも呼ばれた。古くは、貞応2（1223）年の正月に宮中で「手鞠会」が開かれた記録があるが¹⁸⁾、この時は数名の大人が円陣を作り順番に鞠をつき渡していくパスゲームだったという。そのため、手鞠を蹴鞠の変容形態だと見なす説も存在する¹⁹⁾。

近世になると、手鞠は主に女兒の正月遊びとして定着していくが、蹴鞠のようなチーム形式は影を潜め、個人でボールを操作するものが多勢を占めるようになる。もっぱら、立ち上がって鞠をついたり、両膝を地面について難易度を下げたり、あるいは縁側に座るなどして鞠をつき続ける球戯になっていた。

図④は、女兒が手鞠をプレーする様子を描いた『骨董集』の挿絵である。手鞠唄を歌いながら鞠をつき続けることが目的で、バスケットボールのドリブルのように敵や味方を見るために前方に視野を取る必要はなかった。また、今日普及しているゴムチューブ式の高性能なボールとは違って、バウンドした鞠が正確に跳ね返ってきたとは考え難いので、イレギュラーバウンドに備えて腰を屈め、適度に膝を曲げて、鞠を直視するフォームが必然化したと思われる。

図⑤では、江戸市中の茶屋で母娘が手鞠で遊んでいる。台上の女兒は、両膝をついてプレーの難易度を下げていることがわかる。

稀有な事例ではあるが、複数人で鞠を繋いでいくパターンで描かれた絵画も確認される。明和2（1765）年刊行の『絵本江戸紫』²⁰⁾の挿絵である（図⑥）。蹴鞠のように、木に囲まれたプレーグラウンドで数名の女性が空中の鞠を見つめている。

服装からしても、この鞠を足で扱うことは難しく、手で打ち繋いでいくパスゲーム形式でプレーしていたのではないだろうか。ただし、こうしたスタイルの手鞠が描かれることは稀で、この絵画も想像図だった可能性は否めない。また、描かれたボールの種類も蹴鞠用なので、ここで言う手鞠とは別種のボールゲームとして考えることもできる。

ここで、手鞠の製法に触れておきたい。蚕糸を何重にも巻いて球体を作り出し、色のついた糸の編み込み具合によって様々な模様を表現した。鞠の中心には貝殻や鈴などを入れて、バウンドした時に音が出るような工夫も施されている。地面にバウンドさせ続けるためには弾力性が問題になるが、鞠の芯におがくずなどの弾力のある物体を入れることでこれを解消した。鞠のサイズは、大きいもので直径5～6寸（約15～18cm）だったが、近世前期にはもっと小さなボールが使われていたという²¹⁾。ハンドボール（一般・大学・高校男子用で直径19cm）より一回り小さいサイズのボールだった。図⑦は、幕末の江戸で用いられていた手鞠のイラストである。

このように、手の込んだ製造工程を要する手鞠は市販されることもあった。図⑧は、18世紀中頃の京都祇園の繁華街を描いたものである。羽子板を持つ商人の背後に手鞠が並べられていて、商品として流通していたことがわかる。江戸においても、同じような光景が見られたと考えられよう。

手鞠には、リズムに合わせて鞠をつくための唄があった。江戸の手鞠唄は、12ヶ月分の唄が続くバージョン、100章まで続くバージョンなどバリエーションが豊富だった。『守貞漫稿』に記された手鞠唄を部分的に紹介しておきたい²²⁾。

「♪一つとや、一夜あくれは賑やかに、賑やかに、^{ひいとよ}飾り立てたる松飾り、^{かあざ}松飾り」



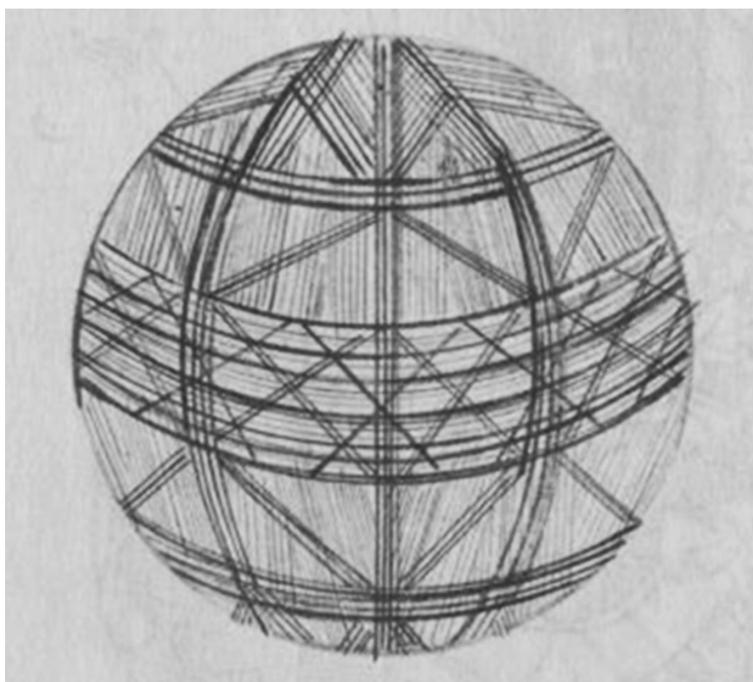
図④ 手鞠をする女兒
山東京伝『骨董集』文溪堂, 1813



図⑤ 手鞠をする母娘
斎藤月峯ほか編・長谷川雪元旦画『江戸名所図会 卷之三』須原屋源助, 1834



図⑥ 蹴鞠形式で行われた手鞠
 禿帯子『絵本江戸紫』須原屋茂兵衛, 1765



図⑦ 近世後期の手鞠に用いられた鞠
 喜田川守貞『守貞漫稿 卷之二十八』(写本)



図⑧ 手鞠を販売する露店
秋里籬島『拾遺都名所図会 卷之二』須原屋平左衛門, 1787

「♪二つとや、二葉の松は色ようて、色よう
て、さんがいまつ かずさやま三蓋松は上総山、上総山」
「♪三つとや、みなさん子供衆は楽遊び、楽遊
び、穴市こまどり羽をつく、羽をつく」
(この後、さらに唄が続いていく)

こうしたリズムのある唄をどこまで歌いきれるか(鞠をつき続けられるか)を巡って、数名で競い合うこともあった。手鞠は、時として競技性のある球戯にもなっていたのである。

手鞠の競技性を見抜いたのが、文政9(1826)~13(1830)年にかけて長崎出島のオランダ商館長を務めた Meijlan である。Meijlan は手鞠が女兒の正月遊びだったことに加えて、ボールについて「普通のゴルフ・ボールの大きさである。それは

綿糸が巻かれたもので、強い弾力性を持っている。」²³⁾と記している。また、この球戯の競技性や技術的な要点を次のように解説した²⁴⁾。

「その遊び方は手でその毬を床に、もしくは壁に対して打ちつけ、はずませることである。それは、それによく合わせた歌が終るまでの間続かなければならない。もしこの毬を、この歌が終る前に打ち損じたら、それは負け遊戯である。そして毬は競争相手の手に渡されるのである。この遊戯は、いかにも簡単そうにやって見せているが、実際は大変な器用さが要求される。というのは、毬のちょうど中心部が打たれなければ、それは毬を、二度目の突きの届かぬところに逸らせてしまうからである。私はそ



図⑨ Morris の著作に掲載された手鞠（HAND BALL）の様子
J. Morris, *Advance Japan : A Nation Thoroughly in Earnest*, W.H. Allen, 1895

れを体験により知ったのである。」

Meijlan の見聞は、手鞠唄に合わせて床や壁に向かって鞠を突き続けるという手順や、ボール操作の技術的なポイントにまで及んでいる。実体験に基づき、手鞠が初心者にとって難易度の高い球戯であることを異文化の視点からつき止めたところに、Meijlan の見聞録の史的な価値があるといえよう。

ほかにも、見聞録の中で手鞠を紹介した訪日外国人に、電信施設建設のお雇い外国人として明治4（1871）年に来日したイギリス人の Moris がいる。Moris はこの球戯を“Hand-ball”と表現し、「ハンドボールやその他のゲームは、子供たちを無邪気に楽しませながら、大人にも路地でプレーされている。」²⁵⁾と述べた。手鞠は子どものみならず、大人によってもプレーされていたというのである。Moris の見聞録²⁶⁾に添えられたイラスト

は、女兒と大人の女性が一緒に手鞠を楽しんでいるように見える（図⑨）。

3. 足を使う球戯

巧みな足さばきでボールを扱う球戯もあった。ここでは、華麗なりフティング技術で古来より各階層の日本人に愛でられてきた蹴鞠、同じく常人離れしたテクニックで鞠を蹴り続け観客を魅了した曲鞠について検討したい。

3-1 蹴鞠

中国大陸から古代の宮中に伝わり優雅な嗜みとして継承されてきた蹴鞠は、中世には武士にも愛好され、近世になると庶民も楽しめる球戯として広まった。一般庶民の蹴鞠は「地下^{じげまり}鞠」と呼ばれた。元禄3（1690）年の職業図鑑『人倫訓蒙図彙』には、上方の蹴鞠に関する記事が見られる²⁷⁾。

近世中期以降、蹴鞠の世界には飛鳥井家と難波家の二大家元が君臨し、その下に「鞠目代」という師範代が置かれた。鞠目代は蹴鞠技術に秀でた存在で、地域や身分に応じて全国に一定数が配され、各地の愛好者に蹴鞠の何たるかを指導した。頂点の家元からライセンスを付与された、蹴鞠界の公認コーチ兼トッププレーヤーとでも表現されるか。鞠目代の中には江戸の庶民も含まれていた。度々開催された江戸城内の蹴鞠の將軍上覧にも、庶民の鞠目代が参加している。

一般的な蹴鞠は、数名のプレーヤー（「鞠足」と呼ばれた）が鞠を地面に落とすことなく蹴り上げて、連続的に受け渡していくパスゲームである。競技場は「鞠庭」と呼ばれ、四隅には四季を表す樹木（松・桜・柳・楓）を植える定めがあった。この「懸の木」は花鳥風月を愛でる平安貴族の雅心を反映しているが、一面ではプレグラウンドの境界線の役割を果たした。また、鞠が枝葉に触れると不規則な変化球が発生してボールコントロールが難しくなるなど、競技をより面白くするエッセンスにもなっていたのである。この障害物は、これを克服するためのより高度な技術を創出する契機ともなった²⁸⁾。

蹴鞠は8人で行うパターンが多く、決められた順番で鞠をノーバウンドで蹴り上げ続け、その回数を伸ばすことを目的とする。チーム対抗で回数を競う「勝負鞠」もあった。鞠を繋ぐ回数を増やすために、鞠足たちは個人技はもちろんチームプレーも重視していた。上がった鞠の高さや強さを知らせるコールサインがあったほか、鞠の飛んだ位置に応じたポジション移動を示すフォーメーションの約束事までであったという²⁹⁾。彼らの「記録」への衝動は、来るべき近代スポーツの思考を先取りしていた。

『都林泉名勝図会』³⁰⁾の挿絵には、18世紀末の京都において家元の飛鳥井家で催された蹴鞠が描

かれている（図⑩）。飛鳥井家では、毎年七夕に蹴鞠の会を行うことが恒例だった。4本の懸の木が植えられた鞠庭で8人の鞠足がプレーしている。鞠庭を囲う「鞠垣」の外には、大勢の観客の姿が見える。

図⑪は、『北斎漫画』³¹⁾に描かれた江戸の蹴鞠である。着衣から判断するに一般庶民だと思われるが、蹴鞠の専用シューズ（鞠沓）ではなく、草履で鞠を蹴り上げているところは興味深い。江戸庶民の地下鞠では装束などはそれほど問題にされず、純粹に鞠を蹴り上げることを楽しむような手軽さがあった可能性が透けて見えてくる。

1人が連続で鞠を蹴る回数は、相手から鞠を受ける時、自分で蹴り上げる時、そして他者へパスする時の3回が基本で、鞠を扱ってよいのは右足だけだった。足の運び方や姿勢の優雅さ、鞠を蹴り上げる高さなど、宮廷出身の球戯だけあってかなり細かいルールが定められている。

初代駐日英国公使として安政6（1859）年に来日した Alcock は、その見聞録の中で蹴鞠に触れている。図⑫は彼の著書“The capital of the tycoon”³²⁾に添えられたイラストである。イラスト自体は日本の絵画の写しだが、Alcockはこの絵に“playing at ball”とのキャプションをつけた³³⁾。

また、文久2（1863）年にスイスから来日した Humbert の“Le Japon illustré”³⁴⁾のイラスト（図⑬）には、京都の蹴鞠の様子が描かれている。図⑫、⑬ともに、1人が単独で鞠を蹴っていて、チーム競技としての体裁は取られていない。このように1人でプレーする形態は「独足」と呼ばれた³⁵⁾。

ほかにも、諸民族のゲーム研究者として知られるアメリカの Culin は、様々な文献を参照しながら日本の蹴鞠を解説した。歴代の天皇や将軍が蹴鞠をこよなく愛したことに加え、家元である飛鳥井家の存在も明記している³⁶⁾。図⑭は、Culin の著書“Korean Games”³⁷⁾に掲載されたイラストで



図⑩ 飛鳥井家で行われた蹴鞠
秋里籬島『都林泉名勝図会 卷之一』須原屋善五郎, 1799

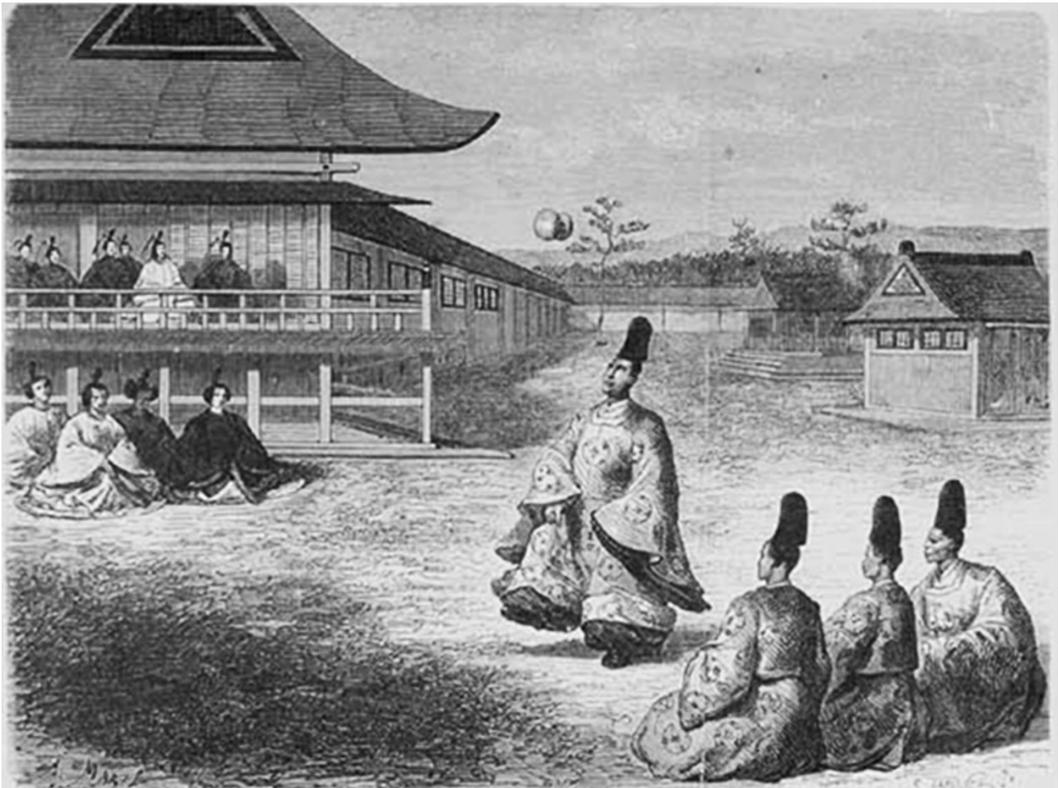


図⑪ 江戸庶民の蹴鞠の様子
葛飾北斎『北斎漫画 初編』竹川藤兵衛, 1814



図⑫ Alcock の著作に掲載された蹴鞠 (PLAYING AT BALL) の様子

Alcock, Rutherford, The capital of the tycoon : a narrative of a three years' residence in Japan, Bradley Co, 1863



図⑬ Humbert の著作に掲載された京都の蹴鞠の様子
Aimé Humbert, Le Japon illustré (t.2), Libr. de L. Hachette, 1870



FIG. 65.—KEMARI ASOBI. FOOT-BALL PLAY. JAPAN. (BOKU-SEN.)

図⑭ Culinの書籍に掲載された蹴鞠（KEMARI ASOBI）のイラスト

Stewart Culin, *Korean Games: With Notes on the Corresponding Games of China and Japan*, University of Pennsylvania, 1895

ある。

蹴鞠に使う鞠は、丸く加工した鹿の革2枚を馬の革で綴じ合わせて作られていたため、完全な球体ではなく中心がくびれたような形になった。鞠の内部は中空で非常に軽く、150g前後、直径20cm程度が標準サイズだったという。強度、弾力ともに今のサッカーボールやラグビーボールには遠く及ばず、鞠の構造からしても力強いキックはできなかった。鞠を破損させずに確実に足先で捉えるための専用シューズが「鞠沓」である。つま先の部分が鴨のくちばしのように広がっていることから「鴨沓^{かもくつ}」とも呼ばれた。

図⑮は、『和国諸職絵つくし』³⁸⁾の1枚で、蹴鞠の用具を作る職人の姿を描いたものである。江戸には蹴鞠用具を製造する専門の職人がいた。中世より存在した業種だったが、鞠を作る職人は「鞠括り」、鞠沓を作る職人は「沓造り」と称され

た。文政7（1824）年刊行の『江戸買物独案内』³⁹⁾は江戸市中の商店や飲食店を紹介したガイドブックであるが、そこには「御鞠御沓師」として蹴鞠の鞠と沓の販売店が紹介されている（図⑯）。江戸の街中で購入できる商品として蹴鞠用具が流通していたことがわかる。

3-2 曲鞠

人並はずれたテクニックを駆使して鞠を蹴る見世物を曲鞠と呼んだ。観客に見せることを前提としたリフティングの職人芸である。

天保12（1841）年の3月、浅草寺観音の開帳に合わせて境内の奥山という場所で曲鞠の見世物が行われた。大坂出身の菊川国丸が披露する曲鞠はたちまち評判となり、日を追うごとに見物人が増えていったという。この時の様子は、『武江年表』に「菊川国丸といへる者、同所（浅草寺奥山



図15 蹴鞠の用具を作る職人
 菱川師宣『和国諸職絵つくし』（写本）1685

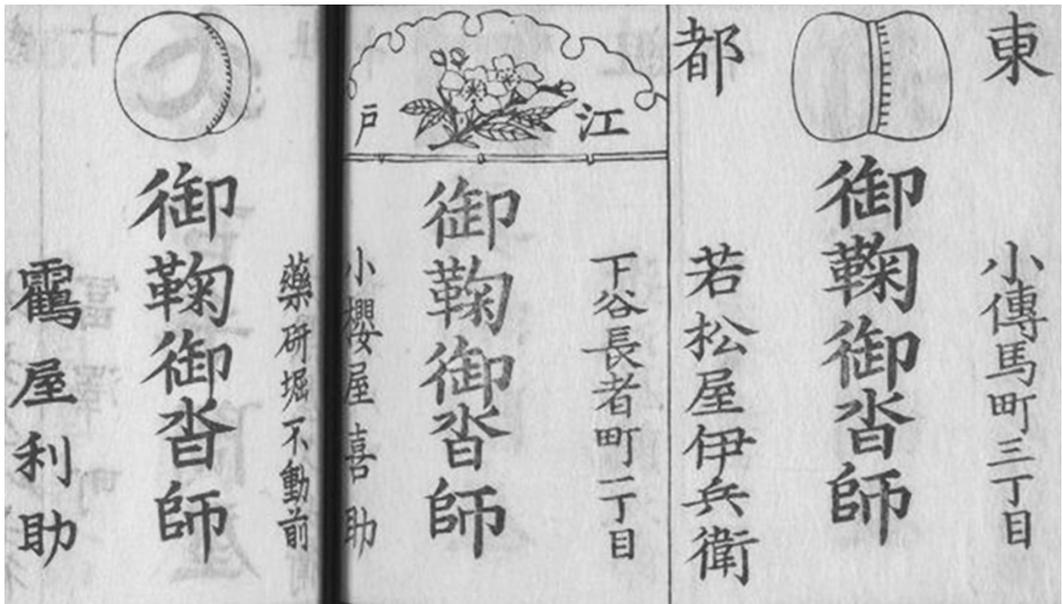


図16 ガイドブックに掲載された蹴鞠用具販売店の広告
 中川五郎左衛門『江戸買物独案内 下巻』山城屋佐兵衛，1810

—引用者注)にて曲鞠を蹴る，見物日毎に山をなせり』⁴⁰⁾と記録されている。

肥前国平戸藩（現在の長崎県平戸市）の松浦静山の随筆集『甲子夜話』には，人づての見聞では

あるが，この曲鞠の一部始終が紹介されている⁴¹⁾。菊川国丸が披露した演目はかなりの数に及んでいるが，以下ではそのいくつかを取り上げて国丸の華麗なる足技の世界を共有したい。



図17 扇留（『甲子夜話』）
松浦静山「甲子夜話」『甲子夜話 三編4』平凡社，1983

「扇留」は鞠を蹴り上げて、片手に持った扇の上で受けて静止させる技だった（図17）。「負鞠」は蹴り上げた鞠を背中受け止めて、背中の上で鞠を弾ませた（図18）。他にも、ヘディングを連続させたり（図19）、鞠を上空に高く蹴り上げるような技も充実していた。鞠をつきながら花を生けたり（図20）、足袋を脱いだり（図21）、半紙に文字を書く（図22）といった芸当も、菊丸にかかれればお手の物である。

「乱杭渡」と「下り藤」は一続きの技だった。まず、2間半（約4.5m）の間隔で並ぶ高さ3尺（約90cm）の杭の上で鞠を蹴り進み、渡り終えたら予め設置しておいた松の垂れ枝にぶら下がり、地上から浮いた足で鞠を蹴り上げる。エンターテインメント性にあふれた演目である（図23）。

「梯子升」は急な階段を鞠を蹴りながら昇降する演目である（図24）。動きが多く難易度も高いダイナミックなパフォーマンスは、観客を魅了し

たに違いない。「八つ橋」は8つに折れ曲がった細い板橋の上を、鞠を蹴り上げながら渡るものだった（図25）。進路が直角になるので、かなり難解な技だったことが想像できる。

このように、菊川国丸という芸人が披露した曲鞠とは、今日のサッカー選手も顔負けの高難度のリフティングだったことがわかる。江戸の人々が国丸の曲鞠を見たさに黒山の人だかりを作ったのもうなずける。

世間を賑わせた菊川国丸の曲鞠は、浮世絵にも描かれている。歌川国芳は、この曲鞠の演目のいくつかを1枚に収めて描き込んだ（図26）。同じく、国芳は猫を擬人化して、曲鞠の演目を描写した（図27）。国丸の曲鞠が江戸人の心を捕え、一大ブームになっていたことがわかる。

4. 打具を使う球戯

手や足で直接ボールを操作するのではなく、用



図⑱ 負鞠（『甲子夜話』）
松浦静山「甲子夜話」『甲子夜話 三編 4』
平凡社, 1983



図⑲ 八重桜（『甲子夜話』）
松浦静山「甲子夜話」『甲子夜話 三編 4』
平凡社, 1983



図⑳ 生花（『甲子夜話』）
松浦静山「甲子夜話」『甲子夜話 三編 4』
平凡社，1983



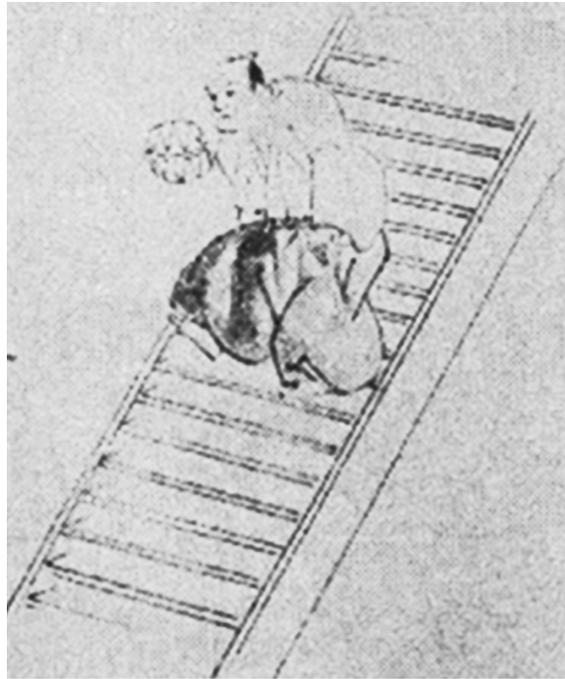
図㉑ 足袋脱（『甲子夜話』）
松浦静山「甲子夜話」『甲子夜話 三編 4』
平凡社，1983



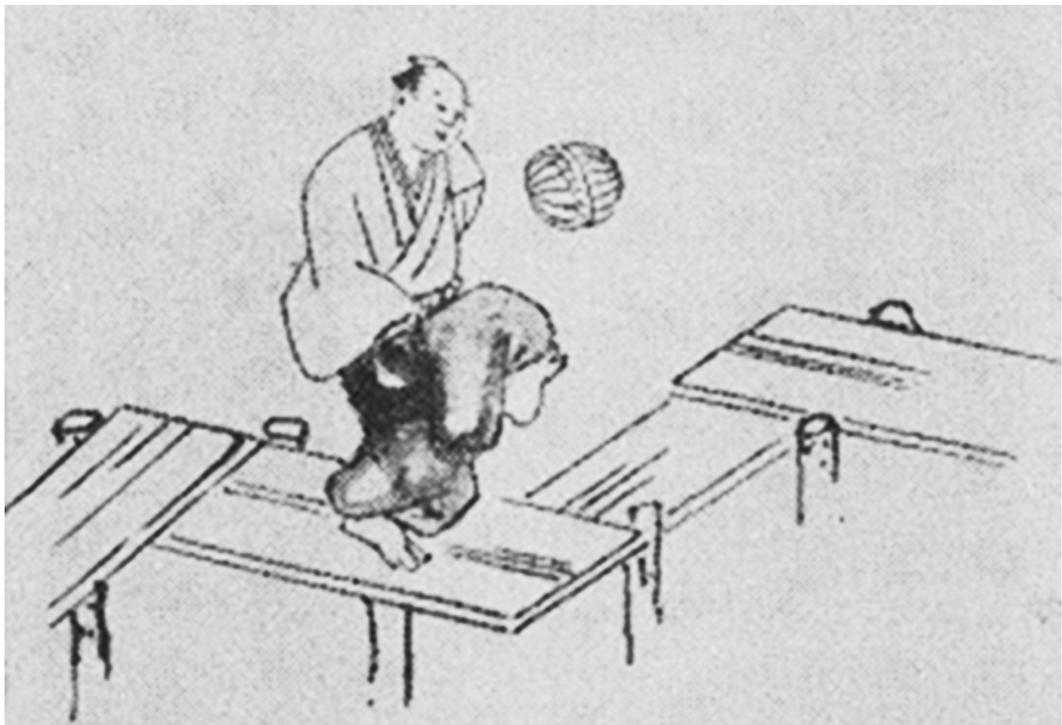
図22 文字書（『甲子夜話』）
松浦静山「甲子夜話」『甲子夜話 三編 4』
平凡社, 1983



図23 乱杭渡と下り藤（『甲子夜話』）
松浦静山「甲子夜話」『甲子夜話 三編 4』平凡社, 1983



図㉔ 梯子升（『甲子夜話』）
松浦静山「甲子夜話」『甲子夜話 三編 4』平凡社，1983



図㉕ 八つ橋（『甲子夜話』）
松浦静山「甲子夜話」『甲子夜話 三編 4』平凡社，1983



図26 浮世絵に描かれた国丸の曲鞠（『菊川国丸の曲鞠』）
府中市美術館編『歌川国芳 奇と笑いの木版画』東京美術，2015



図27 猫を擬人化して描かれた国丸の曲鞠（『流行猫の曲手まり』）
府中市美術館編『歌川国芳 奇と笑いの木版画』東京美術，2015

具を介してボールをコントロールしながら行う球戯もあった。

4-1 羽根つき

羽根つきは主に女兒の間で行われた、凧揚げや独楽回しと並ぶ代表的な正月遊びだった。今日のバドミントンのように、2人で向かい合って羽根を羽子板で打ち合う形態が思い浮かぶが、実はそのプレイスタイルは多様である。3人以上が集まれば、参加者で円を形成して1つの羽根を地面に

落とさず順に打ち繋いでいき、受け損じた者を負けとする「追い羽根」が行われた。また、1人で連続的に羽根を高く突きあげて、その回数を競う形態は「あげ羽子」や「ひとり突き」などと呼ばれたという⁴²⁾。

羽根つきの原型は、平安～鎌倉時代の「胡鬼の子遊び」と称する一種の厄除けの行事だった。子どもが蚊に食われない（病気になる）ための呪いである。中世末期の歳時風俗を書き留めた『世説問答』⁴³⁾の挿絵には、2人で向かい合って羽

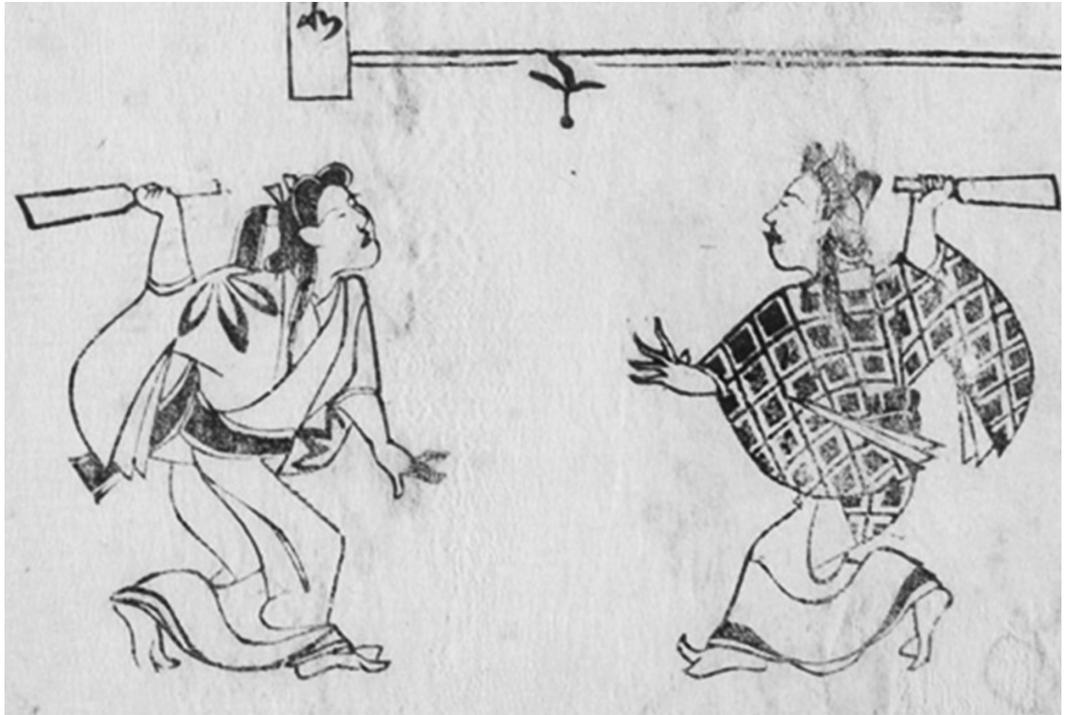


図28 羽根つきを楽しむ子どもたち
一条兼良『世諺問答上』安田十兵衛, 1663

根つきを楽しむ姿が描かれている(図28)。

近世になると、羽根つきの呪い説は次第に否定され、健康の保持増進の意義が強調されるようになった。屋外で風に吹かれながら、上空を見上げて羽根をつく姿勢は子どもの健康に良いとされ⁴⁴⁾、そのような養生思想とも結びついて女兒の正月遊びとして大いに推奨された側面も見逃せない。男児の凧揚げも、同様の理由から推奨された正月遊びである。この健康論は中国の書物に由来するものだが、中国では正月遊びとして手を使わない「羽根けり」が盛んに行われていたという。

江戸の女性たちは、迎春のために新調した着物や履物に身をまとい、流行の化粧をして羽根つきを楽しんだが、そのぶん服装によって運動に大きな制限がかかっていたに違いない。羽根を受け損じて地面に落としたら、顔に墨や白粉を塗られたり羽子板で尻を叩かれることもあった⁴⁵⁾。江戸の

正月は羽根つきに興じる女性たちの笑い声が響き渡っていたという。動きにくい服装がミスプレーを誘発し、さらに罰ゲームの存在がエッセンスとなって羽根つきは誰でも楽しめる面白味のある球戯となっていたのである。

図29は、近世後期の江戸市中で正月遊びとして羽根つきが行われているシーンである。女性に混じって男児の姿も描かれている。正月の羽根つきは専ら女性スポーツだったといわれるが、この魅力あるラケットスポーツに男性陣が加わっていたとしても不思議ではない。

Alcockの著作⁴⁶⁾には、男児に羽根つきを指南する母親の姿が描かれている(図30)。原書のキャプションは“Maternal Lesson”である。日本の絵画を模写したものであろうが、この球戯には、様々なかたちで男女が入り混じる場合があったことを想起させる。



図②⑨ 正月に羽根つきをする江戸の女性と子ども
菊池貫一郎『江戸府内絵本風俗往来』青蛙房, 1965



図③⑩ Alcock の著作に掲載された羽根つき (Maternal Lesson) の様子

Alcock, Rutherford, The capital of the tycoon : a narrative of a three years' residence in Japan,Bradley Co, 1863

女兒の正月遊びだけあって、美しい羽子板を正月に贈答する風習も生まれた。次第にエスカレートして、金箔を押して蒔絵を施した贅沢な羽子板も登場する。華美な羽子板に対して、幕府から禁令が下る事態にも発展した⁴⁷⁾。

『骨董集』⁴⁸⁾に載せられた羽子板のイラストによると、板のサイズは上底が約10cm、打球面の縦は約17cm、グリップ部分は約8cm、厚さは約5mm程度だったという(図③)。概ね、羽子板のサイズ感を知ることができよう。

羽子板はもともと京都で製造されることが多く、「京羽子板」の名で江戸でも販売されていた。やがて、文化・文政期(1804~30)になると江戸で「押絵羽子板」が生み出され、庶民の間で流行する。桐板で製造された羽子板は、鳥の羽とムクロジの実で作った羽根と共鳴して、江戸の正月に心地よい音色を届けていた。

図④は、『守貞漫稿』⁴⁹⁾に描かれた羽根のイラストである。右は京都や大坂で使われた羽根で、6cmほどの細い竹串の先端に鳥の羽を糸で巻き付けて作った。逆の先端にはムクロジの実を刺して固定した。左が江戸の羽根である。江戸では竹串は使わずにムクロジの実に直接羽根を差し込んだという⁵⁰⁾。

Culin は、この球戯を「日本では、正月に女兒がシャトルコックを用いて遊んでいる。彼女らは打具として羽子板を使用する。通常、羽子板は桐材で作られているか、もっと安価な種類の杉などで作られ、片面には人気役者などの顔が描かれている場合がある。シャトルコックは、いくつかの小さな羽が取り付けられた木蓮の種子で製造されている。」⁵¹⁾と解説した。上述してきた説明と、大同小異だといえよう。

4-2 打毬

打毬は紅白の2組に分かれた数騎ずつの騎馬で



図③ 羽子板のイラスト
山東京伝『骨董集』文溪堂、1813

行われる団体戦の球戯である。馬上で先端に網の付いたスティック(毬杖)を操作し、地面に置かれた自チームのボール(毬)をすくい取り、落とさずに運んでゴール(毬門)へと投げ入れ、成功した数で勝敗を競った。毬門のサイズは高さ2mほどで、プレーヤーは直径60cm大の丸い穴を目掛けて投球した。ポロに似た勇壮な球戯で、毬杖の形はラクロスのスティックによく似ている。

プレーグラウンドの馬場は長方形に区画され、短辺の片側に毬門が、もう片側には紅白の毬が置かれていた。毬には平毬と揚毬の2種類があり、

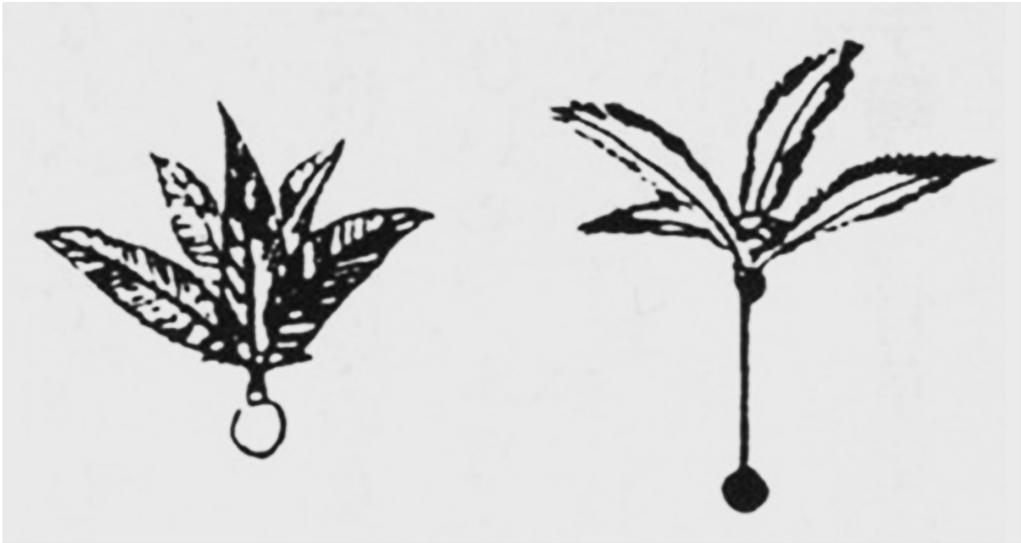


図32 羽根のイラスト
喜田川守貞『守貞漫稿 卷之二十八』(写本)



FIG. 61.—HAGO ASOBI. SHUTTLECOCK PLAY. JAPAN. (BOKU-SEN.)

図33 Culin の書籍に掲載された “HAGO ASOBI”
(羽子戯) のイラスト

Stewart Culin, *Korean Games : With Notes on the Corresponding Games of China and Japan*, University of Pennsylvania, 1895

自チームの平毬を決まった数だけ毬門に投げ入れると、勝負を決する揚毬が場内に設置され、これを毬門に入れたチームが勝者となる。それぞれのチームの平毬が1つ以上投入された後は、人馬がぶつかり合う激しい攻防が繰り広げられた⁵²⁾。審

判役も配置された本格的なチームスポーツである。バスケットボールやサッカーなどと大きく異なるのは、両チームが同じゴールを使うことであろう。ハーフコートのみで行う3人制のバスケットボールとの共通項が見出せる。



図34 武士の打毬

楊洲周延『幕府時代之打毬之図』1888

打毬は古代西アジアのペルシャ世界で誕生した騎馬競技で、日本には飛鳥時代から奈良時代にかけて中国大陸から伝わり、西洋のポロと起源を同じくするものだといわれている⁵³⁾。文献上の初出は神亀4(727)年だとされるが⁵⁴⁾、それが騎馬で行われたのか、徒歩だったのかは定かではない。平安時代の初期から中期にかけて端午の行事の余興として行われていた。

その後、10世紀末で記録が見られなくなり⁵⁵⁾、近世までは衰退していたが、武芸を奨励する八代將軍吉宗の影響もあって打毬が復活すると、武士たちが盛んに打毬に励むようになった。この武家打毬は諸藩にも伝播し、近世後期には八戸、山形、白河、桑名、三春、松代、名古屋、福井、鯖江、和歌山、萩、徳島、高知、柳川などの各藩で打毬が行われていたという⁵⁶⁾。徳川家の打毬では毬杖の長さは2尺5寸(約75cm)程度、毬はゴルフボールほどだった。一方、八戸の南部藩に伝わった打毬は槍の技術向上の手段として奨励されたこともあって、毬杖は7尺5寸(約2.25m)でソフトボール大の毬を用いていたという。

打毬には馬を寄せて敵をディフェンスする局面もあり、巧みな手綱さばきが要求された。片手でスティックを操作することは、片手で武具を扱いながら片手手綱で馬を操る訓練にもなる。戦乱から遠ざかった時代にあって、打毬はスポーツをしながらにして馬術の鍛錬ができる恰好の教材でもあった。だから、打毬は基本的には武士の球戯として理解すべきである。

『幕府時代之打毬之図』⁵⁷⁾は明治21(1888)年の作品で、近世後期の武士の打毬の様子を回想して描かれている(図34)。画中右側の観覧席では、奉行らが勝負の行方を見守っている。毬をすくってゴールを狙う者と、それを激しくディフェンスする者が描かれていて、エキサイティングなゲーム展開が伝わってくる。また、図35の『千代田之御表 打毬上覧』⁵⁸⁾は、打毬をしている武士たちの模様である。画中中央に板状の毬門が描かれている。

武士の子弟たちも、訓練を兼ねて打毬の簡易形態を楽しんでいた形跡がある。幕末の水戸藩下級武士の生活を聞き書きした文献には、水戸の私塾



図35 武士の打毬

楊洲周延『千代田之御表 打毬上覧』福田初次郎, 1897

で行われていた徒歩形式の打毬が登場する⁵⁹⁾。

ここで、訪日外国人の眼差しを確認しておきたい。安政6（1859）年に来日した Alcock は、滞在中に日本の打毬を目の当たりにした。Alcock は打毬について、「役人たちは騎馬のゲームを行う。ラケットのようなものでボールを掬い上げ、競技場の端に設置されている穴の中に投げ込むというゲームである。競技者は2つのチームに分けられ、色で区別される。相手がラケットにボールを入れて馬を走らせている時に、そのラケットの中のボールを打って弾き飛ばすところは大変面白いがある。」⁶⁰⁾と解説しているが、そのゲームの様相は上述してきた説明と矛盾しない。彼の著作⁶¹⁾には日本の絵画からの写しと思しきイラストが添えられている（図36）。

万延元（1860）年、プロイセン政府から通商条約の締結のために日本に派遣された外交官の Eulenburg も、「球戯は馬に乗ってする。先に綱の

ついた棒を持ち、二つの陣営に分かれ、一つは赤の、もう一つは白い球でもってそれが自分の穴に入らないよう防ぎながら、自分の球を相手の穴に入れようとするものである。この遊びは非常に乗馬の訓練を必要とし、勇敢に行なわれるということである。」⁶²⁾と記す。Eulenburg が紹介した「球戯」とは、すなわち打毬のことに相違ないが、彼はこの運動競技が馬術訓練を兼ねていることを的確に見抜いていた。

こうして、武士を担い手として近世中期以降に奨励された徳川家の打毬は、明治維新後は宮内庁に引き継がれていった。その模様を記録した訪日外国人もいる。

明治39（1906）年、英国皇族の首席随員として来日（再来日）を果たした Mitford の日記には、宮中で催された打毬の一部始終が書き留められている⁶³⁾。

まず、競技場の広さやゴールの形状、得点版の

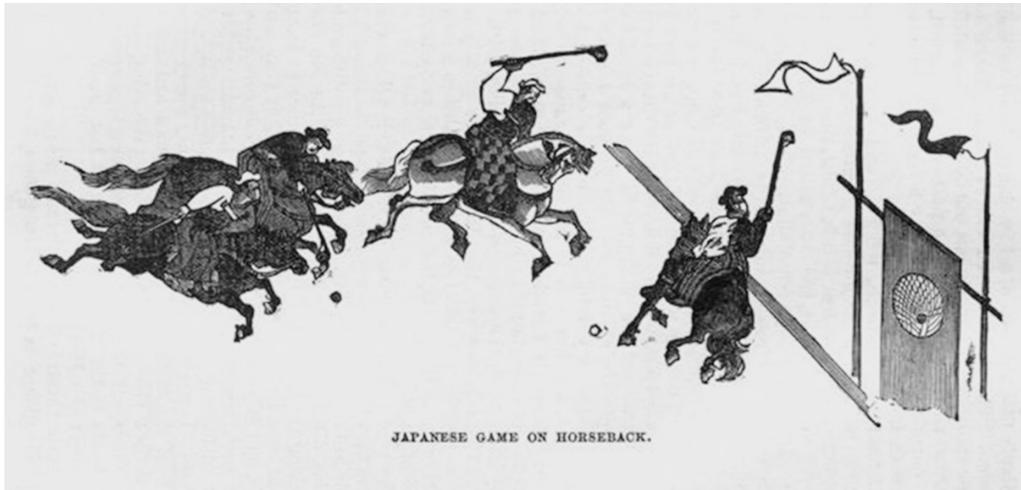


図36 Alcock の著作に掲載された打毬 (Japanese games on hoeseback) の様子

Alcock, Rutherford, The capital of the tycoon : a narrative of a three years' residence in Japan, Bradley Co, 1863

説明である。文中の「小さなポケット」がゴールを指している。

「競技場として規定された場所は、長さ六十ヤード（約54.6m—引用者注）、幅二十ヤード（約18.2m—引用者注）の広さであった。一方の端にゴールとなる高い板塀があって、その真ん中にボールを長入れる小さなポケットがついていた。片方の端には動かすことのできる円盤がおいてあって、得点を示すために、上下できるようにになっていた。最後の二個の円盤はそれぞれ赤と白の色で、十文字に襷がけになっていて、この一つが下ろされるまでは、ゲームの勝敗が決定しないのである。板塀の上の両側には日本の旗竿が立ててあり、一本には赤の、他の一本には白い吹き流しが結びつけてあった。」

次に、競技場内にボールが撒かれ、厳かな雰囲気の中でプレーヤーたちが入場する。競技者のユニフォームもよくわかる。

「競技場の地面の上に数個の赤と白のボールが

撒かれた。その中の二つのそれぞれ赤と白のボールには得点版と同じ十文字の印がついていた。一方は白い服を着て、もう一方は赤い服を着た競技者が馬に乗って入ってきた。彼らの服装は昔風で、武士の被る平たい漆塗りの笠を被り、幅の広い馬乗袴をはいていた。その鞍も鎧も服装全体が古風だった。赤服の競技者を先頭にして白服の競技者が続き、行列は極めて厳かな様子で乗り入れてきた。彼らは宮様方や、その他の賓客の座っている前を通る時、重々しく礼をし、次いで競技が始まった。」

さらに、Mitford は、競技開始後の戦況を詳しく解説する。「籐の杖」とは毬杖、「印のついたボール」は揚毬のことである。揚毬が投入されてからのエキサイティングな攻防の様子が見事に描写されている。「八人の敵」という文言から、この打毬は1チーム8人制だったことになろう。

「どの騎手も先端に小さい網のついた籐の杖を持っていた。この網で身を屈めて味方の色のボールを掬い上げるのであるが、このこと自体

が機敏さと器用さを要求される技であって、それから騎馬で駆けながら平均をとってボールが網から落ちないように決勝点まで運び、杖を振ってボールを穴の中へ投げ入れるのである。最初の三、四回、ボールが投げ込まれるまでは、双方ともに、それほど激しい抵抗はない。

それが過ぎると、片方から敵方への攻撃が始まる。敵に向かって馬を飛ばし、周りを取り囲んで可能な限り、あらゆる妨害を仕掛ける。しかし、ゲームの勝敗を決する最後の二個の印のついたボールの順番となると、競技は一段と酷となる。この時になると、両陣営の主将が前面に出てきて、興奮はその極に達し、大混戦となるのである。叫び声をあげる大勢の熟練した競技者の中を、長い杖の先につけた網にボールを入れて駆け足で決勝点まで運ぶのは、馬術の試練として並々ならぬものである。そして、決勝点に達するや、邪魔しようとして、あらゆる力を振りしぼって、突進してくる八人の敵をかいぐってボールを投げ込まねばならない。」

Mitford の目に留まったのは、1 人の名選手の存在だった。いつの間にか、観戦していた Mitford も手に汗を握る興奮ぶりを見せ、競技はほどなくして終幕する。

「白組の主将は東京では有名な打毬の優勝選手で、フットボールで一流の選手がボールを蹴って運ぶのと同じく、彼の技量は素晴らしい見ものであった。敵の裏をかき、右へ行くと見せかけて左へ回ったり、一人と相対しながら他からも攻撃され、それでも決してボールを落とすことなく、一度ならず二度、三度と妨害を受けながらも、最後には自分のボールをポケットの中に巧みに投げ入れるのである。そして大なる勝利をかち得たかのように、鬨の声を上げると、

入ってきた時と同じように、礼をして競技者たちは場外へ出て行った。興奮は伝染しやすいもので、我々も騎手と同様に競技に熱中しているような思いであった。」

続けて、Mitford は打毬を下記のように評価する。彼の眼には、馬術訓練を兼ねた日本の打毬はかなり高難度な技術を要求されるものに映り、イギリス本国のスポーツに勝るとも劣らない秀逸な球戯だと理解したようである。

「日本人は打毬のゲームを高く評価しているが、それは騎手の訓練に優れた効果があるので、もっともなことである。この競技の難しさをあますところなく伝えるのは容易なことではない。競り合いは最大の激しさであり、その嵐と緊張のさなかでボールのバランスを保たねばならぬのである。我々の見物したのは二回のゲームだけで、騎兵の攻撃のように熱狂して競い合ったにもかかわらず、落馬した者は一人だけであった。このゲームこそ英国にも導入されるべきものではないかと私には思えた。」

4-3 毬杖

毬杖きつちようは、木槌を使って相手から打ち込まれたボールを打ち返す球戯である。馬上で杖を手にして毬をゴールに投げ入れる打毬の主な担い手は武士だったが、庶民はもっぱら毬杖の方を楽しんでいた。近世に行われた毬杖は、基本的には子どもの正月遊びだった。図②⑦は、山東京伝の『骨董集』⁶⁴⁾に描かれた毬杖の道具である。このような木槌と木製のボールが用いられたが、同書が成立した文化10(1813)年の時点では、すでに見ることのない歴史上の代物になっていたという。

毬杖は打毬から派生したという説もある。近世の遊戯論者たちは「毬杖ぶりの遊は、打毬よ



図⑳ 毬杖の道具

山東京伝『骨董集』文溪堂，1813

り起る。]⁶⁵、「毬杖ハ元打毬の変風なるべし」⁶⁶などと解説した。しかし、打毬のボールが弾性のある球体だったのに対して、毬杖のボールは木を削って作られていた。丸太を輪切りにした円盤状のボールを使うこともあったらしい。図㉔は、『世諺問答』⁶⁷に描かれた中世末期の毬杖の模様である。竹ぼうきや後述するぶりぶりを手に競技に参加している者もいる。

『骨董集』には毬杖のルールが説明されている。2チームに分かれて、10間（約18m）から12～13間（約21.6m～23.4m）ほど離れて両チームが相対する。その中央にセンターラインを引き、片方のチームが投げたボールを、もう片方のチー

ムが毬杖と呼ばれた木槌を使ってディフェンスした。もし、ディフェンス側が止められずにボールがセンターラインを越えて動きが止まったら、投げた側にポイントが入る。反対に、センターラインより前でボールを食い止めて相手陣内へ打ち返せば、ディフェンス側にポイントが入った⁶⁸。このように、『骨董集』に掲載された毬杖とは、両チームの攻防が交互に入れ替わり、オフense側が投げるボールをディフェンス側が木槌ではね返す球戯だったといえよう。

このタイプの球戯は全国各地で確認されるが、その勝敗の決定方法は山東京伝が紹介したようなポイントを争うタイプのほかにも、相手チームを

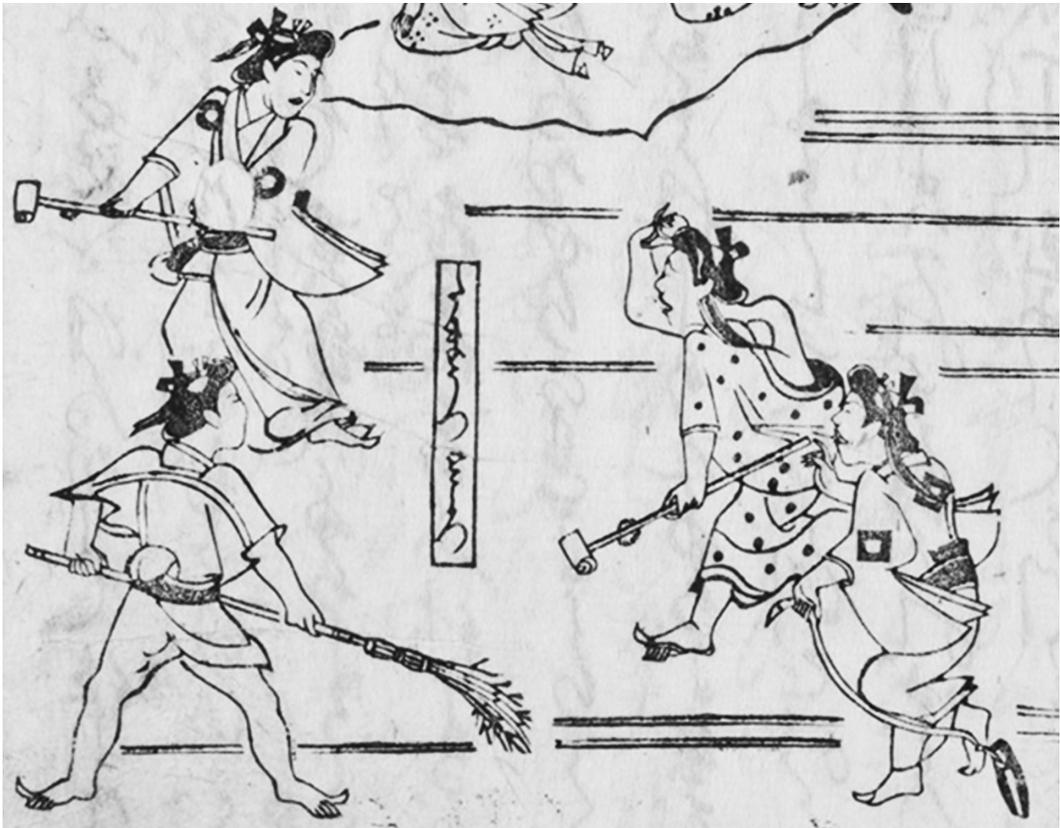


図38 中世に行なわれていた毬杖
一条兼良『世諺問答 上』安田十兵衛, 1663

一定エリアまで追い詰める陣取り型のルールが存在した。両者の共通項は、「1回ごとに完結する攻防の積み重ね」だという⁶⁹⁾。なお、Culinは著書の中で、類似の球戯として鹿児島ハマ投げに触れている⁷⁰⁾。

平安末期に製作された公家の年中行事や民間の歳時風俗を記録した『年中行事絵巻』⁷¹⁾には、庶民が毬杖を楽しんでいる場面が描かれている(図39)。向かい合う2チームが、木槌を手に激しくボールを打ち合っている。子どもの姿もある。

ところで、毬杖は近世を通して盛んに行われたスポーツではなかった。18世紀初頭の書物にも、木槌を用いた毬杖はほとんど見られなくなったと記されている⁷²⁾。この時代には、すでに毬杖は見戯としても衰退していたことになる。

近世中期以降、江戸の子どもたちの間で、毬杖に変わって「ぶりぶり」が行われるようになった。同じくボールを打ち合う球戯だったが、木槌ではなく、八角形にかたどった木に紐をつけ地面を引きずるようにして操作した。スティックというより、ラケットに近い形であろうか。ただし、ぶりぶりは男児に農作業を覚えさせるための正月遊びだという説もあるので⁷³⁾、必ずしも毬杖と同類の球戯として扱うことは難しい。

図40には、八角形にかたどった木製の打具(ぶりぶり)で、平たい木の球を打ち合っている姿が描かれている。躍動感のあるボールゲームだった様子が伝わってくる。竹ぼうきや箕も打具として使われていたようである。この『絵本大和童』⁷⁴⁾は享保9(1724)年の作品だが、この時期には毬

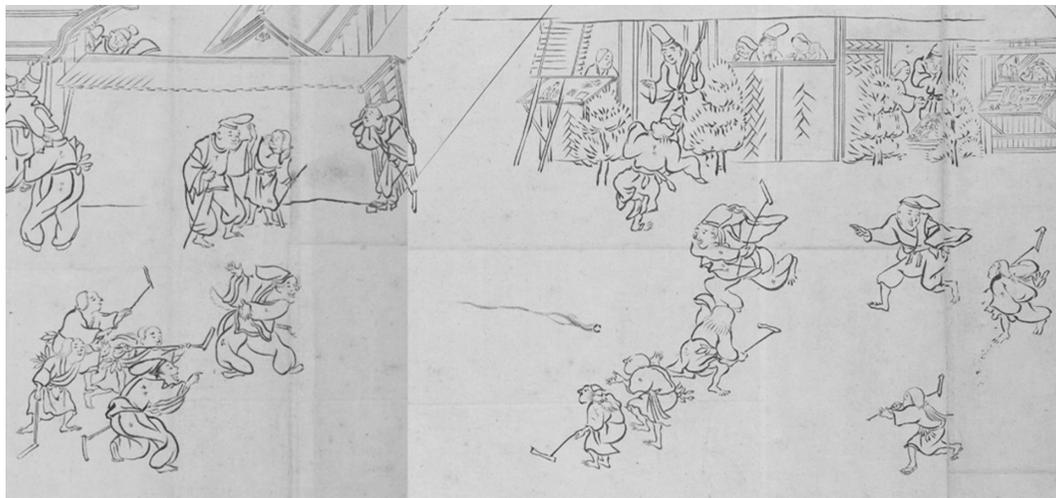


図39 平安末期の毬杖
藤原光長『年中行事絵巻』谷文晁（写本）

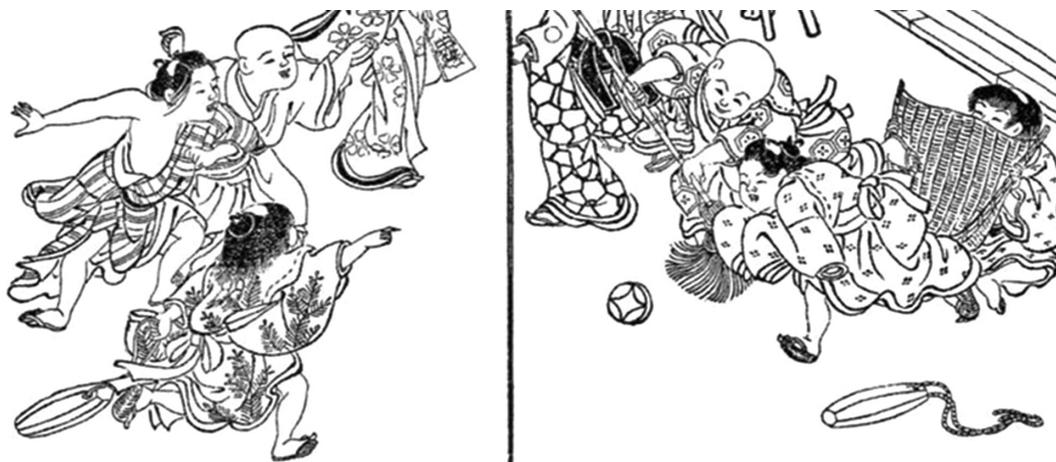


図40 ふりふりを楽しむ子どもたち（『絵本大和童』）
中城正堯『江戸時代子ども遊び大事典』東京堂出版，2014

杖にとって変わってふりふりが盛んになっていた。

ともあれ、ふりふりも近世後期には衰退していった。武士の騎馬打毬のように将軍の号令があればともかく、毬杖にしろ、ふりふりにしろ、庶民の間で広いプレーグラウンドを使ったスポーツ競技が長い期間をかけて定着していくのは、そう簡単なことではなかったのであろう。

5. おわりに —江戸の球戯の特徴—

以上、本稿では近世の江戸の球戯の概観を試みた。近世日本の大都市では、武士や庶民男性のみならず女性や子どもに至るまで、幅広い層の人々が多種多様な球戯に興じていた。本論では、技術史的な関心から手を使う、足を使う、打具を使うという3パターンに分類したが、各々の球戯の行われ方を考えれば、なお様々なフィルターをかけ

ることが可能である。

技の「達成度」を争点とする球戯に、お手玉とけん玉があった。いずれも、互いに同じ運動課題を設定して、どちらが先に達成できるのか、その出来栄を競い合うところにゲームが成立する。

「継続」を目指す球戯もある。手鞠は、手鞠唄が終るまではミスをせずにボールをバウンドさせ続ける技量が必要だったし、蹴鞠はボールを地面に落とさずにチームでパスを繋ぎ続けることを目指して足技が磨かれていた。

ボールを「打ち返す」ことを趣旨とする球戯には、羽根つきや毬杖がある。それぞれ個人とチームという違いこそあれ、打具を用いた対人形式の球戯だった。こうしたラケットスポーツは、正月遊びとして子どもが主な担い手だったところに特徴がある。

「数量」で優劣を判定する機能を持っていたのが蹴鞠と打毬である。蹴鞠はボールを蹴り繋いだ数を競い、打毬はゴール成功数によってゲームが大きく動いた。こうしたパフォーマンスの「数量化」と、それともなう「記録への固執」は、かつて Guttman が示した近代スポーツのメルクマールを部分的に満たすものでもある⁷⁵⁾。

技の追求が高度に進んだ結果、球戯を「魅せる」ことを前提とした大道芸も登場する。達人が披露した華麗なボールさばきは、観客から見物料を徴収するに足る曲芸の域に達していた。

このようにして、江戸の球戯は様々な要素が複合的に絡み合って成立していた。発展史的に見れば、江戸の球戯は近代ボールゲームの前史に位置づけられる。視点を転ずれば、活発な球戯の存在をもって、やがて渡来する西洋由来のボールゲームを受け入れる素地が近世の江戸に芽吹いていたと考えることもできよう。円い物体を使って遊ぶという慣習そのものがなければ、西洋のボールゲームは手に負えない未知の運動文化として棚上

げされてしまったかもしれない。もっとも、「近代」という価値基準を問題にせずとも、近世の江戸には人々を魅了する純然たるスポーツとしての球戯が存在していた事実を確認することができよう。

ところで、大量生産を見越した製造加工技術が発達していなかった近世にあって、ボールをはじめ、球戯用具の製造業を請け負った職人の存在は見逃せない。お手玉などは家庭でも手作りが可能だっただろうが、大半のボールはプレーヤーが自ら手軽に製造できるような代物ではなかった。したがって、江戸の球戯は、職人の存在なくしては成立しなかったことになる。

本論でも取り上げたように、蹴鞠に関しては、鞠の製造を請け負う「鞠括り」や、鞠沓を作る「沓造り」と呼ばれた職人たちが江戸の街中に店を構えていた。羽子板を製造する職人の姿は、17世紀末頃の書物においてすでに確認することができる⁷⁶⁾。『拾遺都名所図会』には、京都の祇園で手鞠と羽子板を店頭で販売する商店が描かれている⁷⁷⁾。

職人たちが高度な手作業を駆使して作ったボールの製造工程、そしてボールそのものの性能に関する用具史的な視点も欠くことはできない。球戯を成立ならしめる必須要件である「ボール」にフォーカスした考察は、前近代の球戯史研究において重要な領野を形成する。ボールの性能とは、当該球戯の技術やルール、さらには面白みを決定づける関心度の高い要素だからである。この課題に対する検討は本稿では不十分だったといわねばならない。別稿を期すことにしたい。

<参考文献>

- 1) 谷釜尋徳「近世における江戸庶民のスポーツに関する一考察」『東洋法学』62巻3号, 2019, pp. 355-373
- 2) シュテーター・コンツァック・デブラー著、唐木國彦監訳『ボールゲーム指導事典』大修館書店, 1993,

- pp. 2-3
- 3) 渡辺融「蹴鞠の展開についての一考察『東京大学教養学部 体育学紀要』3号, 1966, pp. 13-18頁/渡辺融「懸りの木に関するスポーツ史的考察」『スポーツ史研究』3号, 1990, pp. 1-13/渡辺融「蹴鞠 技術と雅心の融合」『ボール 球体的快楽』INAX, 1991, p. 34-35/渡辺融・桑山浩然『蹴鞠の研究』東京大学出版会, 1994/渡辺融「近世蹴鞠道飛鳥井家の一年」『放送大学研究年報』17号, 1999, pp. 77-96, など
 - 4) 東京教育大学体育史研究室『図説世界体育史』新思潮社, 1964/岸野雄三「日本近世のレクリエーション」『レクリエーションの文化史』不味堂出版, 1972, pp. 135-148/樋口智之『特別展図録 競う! 江戸時代のスポーツ』仙台市博物館, 2001/猪木武徳『遊び 異邦人のまなざし 第5輯』国際日本文化研究センター, 2007/谷釜尋徳「近世における江戸庶民のスポーツに関する一考察」『東洋法学』62巻3号, 2019, pp. 355-373/江戸東京博物館『特別展図録 江戸のスポーツと東京オリンピック』江戸東京博物館, 2019, など
 - 5) 渡辺京二『逝きし世の面影』平凡社, 2005, pp. 18-19
 - 6) ハイネ著, 中井晶夫訳『ハイネ世界周航日本への旅』雄松堂出版, 1983, p. 234
 - 7) 内山治樹「球技の特徴」『球技のコーチング学』大修館書店, 2019, p. 19
 - 8) シュテラー・コンツァック・デプラー著, 唐木國彦監訳『ボールゲーム指導事典』大修館書店, 1993, pp. 6-7
 - 9) グリフィンほか著, 高橋健夫・岡出美則監訳『ボール運動の指導プログラム』大修館書店, 1999, pp. 8-9
 - 10) 岸野雄三『体育史』大修館書店, 1972, p. 90/岸野雄三「スポーツの技術史序説」『スポーツの技術史』大修館書店, 1972, p. 26
 - 11) 喜田川守貞『守貞漫稿 卷之二十八』(写本)
 - 12) 越谷吾山『諸国方言物類称呼 卷五』須原屋市兵衛, 1775
 - 13) 喜田川守貞『守貞漫稿 卷之二十八』(写本)
 - 14) 義浪『拳会角力図会 二卷』河内屋太助, 1809
 - 15) 義浪『拳会角力図会 二卷』河内屋太助, 1809
 - 16) 喜多村信節「嬉遊笑覧」『嬉遊笑覧(四)』岩波書店, 2005, p. 296
 - 17) セップ・リンハルト『拳の文化史』角川書店, 1998, p. 44
 - 18) 『吾妻鑑』国書刊行会編『校訂増補 吾妻鏡 下巻』大観堂, 1943, p. 40
 - 19) 山東京伝『骨董集』文溪堂, 1813
 - 20) 禿帚子『絵本江戸紫』須原屋茂兵衛, 1765
 - 21) 喜田川守貞『守貞漫稿 卷之二十八』(写本)
 - 22) 喜田川守貞『守貞漫稿 卷之二十八』(写本)
 - 23) メイラン著, 庄司三男訳『メイラン 日本』雄松堂出版, 2002, p. 195
 - 24) メイラン著, 庄司三男訳『メイラン 日本』雄松堂出版, 2002, p. 195
 - 25) J. Morris, *Advance Japan : A Nation Thoroughly in Earnest*, W.H. Allen, 1895, p. 83
 - 26) J. Morris, *Advance Japan : A Nation Thoroughly in Earnest*, W.H. Allen, 1895, p. 81
 - 27) 蒔絵師源三郎『人倫訓蒙図彙』平楽寺, 1690
 - 28) 渡辺融「懸りの木に関するスポーツ史的考察」『スポーツ史研究』3号, 1990, p. 2/渡辺融「日本人の球心」『日本文化の独自性』創文企画, 1998, pp. 27-29
 - 29) 渡辺融「蹴鞠 技術と雅心の融合」『ボール 球体的快楽』INAX, 1991, p. 34-35
 - 30) 秋里籬島『都林泉名勝図会 卷之一』須原屋善五郎, 1799
 - 31) 葛飾北斎『北斎漫画 初編』竹川藤兵衛, 1814
 - 32) Alcock, Rutherford, *The capital of the tycoon : a narrative of a three years' residence in Japan*, Bradley Co, 1863, p. 280
 - 33) Alcock, Rutherford, *The capital of the tycoon : a narrative of a three years' residence in Japan*, Bradley Co, 1863, p. 281
 - 34) Aimé Humbert, *Le Japon illustré (t. 2)*, Libr. de L. Hachette, 1970, p. 409
 - 35) 石井昌幸「蹴鞠」『民族遊戯大事典』大修館書店, 1998, p. 62
 - 36) Stewart Culin, *Korean Games : With Notes on the Corresponding Games of China and Japan*, University of Pennsylvania, 1895, pp. 41-43
 - 37) Stewart Culin, *Korean Games : With Notes on the Corresponding Games of China and Japan*, University of Pennsylvania, 1895, p. 42
 - 38) 菱川師宣『和国諸職絵つくし』(写本) 1685
 - 39) 中川五郎左衛門『江戸買物独案内 下巻』山城屋佐兵衛, 1810
 - 40) 斎藤月岑「武江年表」『増訂 武江年表』国書刊行会, 1912, p. 233
 - 41) 松浦静山「甲子夜話」『甲子夜話 三編 4』平凡社, 1983
 - 42) 可児徳・矢嶋鐘二『小学校遊戯の理論及実際』東京宝文館, 1913, pp. 275-276
 - 43) 一条兼良『世諺問答 上』安田十兵衛, 1663
 - 44) 香月牛山『小児必用養育草 卷六』1703
 - 45) 菊池貫一郎『江戸府内絵本風俗往来』青蛙房, 1965, p. 13
 - 46) Alcock, Rutherford, *The capital of the tycoon : a narrative of a three years' residence in Japan*, Bradley Co, 1863, p. 281
 - 47) 鈴木敏夫「徳川幕府法令における遊戯統制」『北海道大学教育学部紀要』35号, 1980, p. 87
 - 48) 山東京伝『骨董集』文溪堂, 1813
 - 49) 喜田川守貞『守貞漫稿 卷之二十八』(写本)

- 50) 喜田川守貞『守貞漫稿 卷之二十八』(写本)
- 51) Stewart Culin, *Korean Games : With Notes on the Corresponding Games of China and Japan*, University of Pennsylvania, 1895, p. 40
- 52) 江戸東京博物館『特別展図録 江戸のスポーツと東京オリンピック』江戸東京博物館, 2019, p. 21
- 53) 岩岡豊麻「打毬」『最新スポーツ大事典』大修館書店, 1987, p. 752
- 54) 東京教育大学体育学部体育史研究室『図説世界体育史』新思潮社, 1964, p. 206
- 55) 渡辺融「日本古代のスポーツ」『体育・スポーツ史概論 改訂3版』市村出版, 2015, p. 38
- 56) 渡辺融「江戸時代の武家打毬」『騎馬打毬』霞会館, 2009, p. 80
- 57) 楊洲周延『幕府時代之打毬之図』1888
- 58) 楊洲周延『千代田之御表 打毬上覧』福田初次郎, 1897
- 59) 山川菊栄『武家の女性』岩波書店, 1983, p. 103
- 60) Alcock, Rutherford, *The capital of the tycoon : a narrative of a three years' residence in Japan*, Bradley Co, 1863, p. 283
- 61) Alcock, Rutherford, *The capital of the tycoon : a narrative of a three years' residence in Japan*, Bradley Co, 1863, p. 84
- 62) オイレンブルク著, 中井晶夫訳『オイレンブルク日本遠征記 上』雄松堂出版, 1969, pp. 220-221
- 63) ミットフォード著, 長岡祥三訳『ミットフォード日本日記』講談社, 2001, pp. 84-86
- 64) 山東京伝『骨董集』文溪堂, 1813
- 65) 喜多村信節「嬉遊笑覧」『嬉遊笑覧(三)』岩波書店, 2004, p. 276
- 66) 山東京伝『骨董集』文溪堂, 1813
- 67) 一条兼良『世諺問答 上』安田十兵衛, 1663
- 68) 山東京伝『骨董集』文溪堂, 1813
- 69) 寒川恒夫「ぎっちょう」『最新スポーツ大事典』大修館書店, 1987, pp. 202-203
- 70) Stewart Culin, *Korean Games : With Notes on the Corresponding Games of China and Japan*, University of Pennsylvania, 1895, pp. 57-58
- 71) 藤原光長『年中行事絵巻』谷文晁(写本)
- 72) 寺島良安『倭漢三才図会』秋田屋太右衛門, 1824
- 73) 山東京伝『骨董集』文溪堂, 1813
- 74) 中城正堯『江戸時代 子ども遊び大事典』東京堂出版, 2014
- 75) グットマン著, 谷川稔・石井昌幸・池田恵子・石井芳枝訳『スポーツと帝国—近代スポーツと文化帝国主義—』昭和堂, 1997, pp. 3-4
- 76) 蒔絵師源三郎『人倫訓蒙図彙』平楽寺, 1690
- 77) 秋里籬島編『拾遺都名所図会』吉野屋為八, 1787